

## 医学論文における構造化抄録の活用の可能性

青木 仕  
順天堂大学図書館

**背景：**抄録は、本文の内容を通読する判断材料となるほか、本文内容の報知、データベースの情報源、索引語の材料としても有用な役割を果たしている。本文と同じように Heading をたてて(構造化されて)記載された抄録を Structured Abstracts(SA)という。SA は EBM の観点からも今日注目され一つの情報流通メディアの核として重要な役割を担っている。

**目的：**今日、臨床系医学雑誌を中心に採用が推進されている SA であるが、医学論文全般に適用できるかその活用の可能性を検証する。1. 医学の各分野での SA の採用の現状を詳細に調べるとともに、SA の採否に影響する要因を分析する。2. 多数の医学論文の本文のセクションおよびサブセクション構成を調査し、標準的 SA 構成が現実可能であるかを検討する。

**方法：**I. 1.1).以下の雑誌について SA 採用状況を調査した;(1)日本医学会・分科会発行誌、(2)海外の主要医学雑誌約 500 誌(JCR の 17 分野から、レビュー誌を除いた被引用数上位 30 誌ずつを選択)。2).SA 採用に関連すると考えられる諸要因(分野、発行国、創刊年、発行者)と SA 採用との関連の有無を、カイ二乗検定により調べた。II. 1.対象誌および対象論文; JCR から基礎系と臨床系から 6 分野を選定し、各分野 Total Cites 上位 10 誌の 580 論文を基礎データとした。2. 本文と抄録の構成を調査した;分析方法;(1)全論文の本文の構成項目を整理した。これらのうち SA 採用論文については SA の構成項目も整理した。(2)本文の研究法のサブセクションを A.デザイン、B.対象、C.実験操作、D.実験結果の判定法、E.統計処理に分類した。この分類を行う際、各分野の専門家の助言を受けその妥当性を確保した。

**結果：**I. 1.1).(1).国内学会誌の SA 採用状況は、1999 年の 6 誌から 2003 年の 25 誌と増加していた。特に臨床系雑誌に増加傾向が見られた。しかし、医学分野全体の採用率は 19.8%にとどまっていた。(2).海外誌の SA 採用状況は、臨床系が 70%前後であるのに比べ基礎系は 20%未満と低調であり、分野によって採用率に違いがあった。2).基礎系・臨床系・その他の 3 分野区分の間には、SA の採用に有意差が認められた。しかし、その他の要因については SA 採用との関連は見出されなかった。II. 1. 本文の構成項目は、SA 採用の有無に関わらず、基礎系、臨床系ともに全論文において IMRAD 形式で構成されていた。SA の構成は、AHWG 主唱の 8 項目よりも Objectives, Methods, Results, Conclusion の 4 項目の Heading が一般的であった。これらの結果から、SA 未採用誌においても、この 4 項目からなる SA の採用の可能性が示唆された。2.本文の研究法は、580 論文中 418 がサブセクションに分けられ、1 論文当たりサブセクション数は平均 4~5 個であった。

**結論：**サブセクションの母数に占める研究法の 5 つの各内容の割合が 70%前後でその内容を満たしていると仮定したとき、本文の構成項目と研究方法の分析により、医学全般には Objective, Material, Experimental, Result, Conclusion の 5 項目、生理学は Objective, Material, Experimental, Measurement, Result, Conclusion の 6 項目、臨床系は Objective, Material, Experimental, (Statistical Analysis または Measurement), Result, Conclusion の 6 項目に集約された。このように IMRAD からなる科学論文全般においても SA 採用の可能性が導き出された。